

# 幼稚園教育における音楽活動のあり方 —小学校「音楽科」への接続を手がかりとして—

## A Study of Music Activities in Kindergarten : Focusing on Transition from Kindergarten to Elementary School

今井香織  
Imai Kaori

キーワード：音楽活動、幼小接続、幼稚園教育要領、領域、小学校学習指導要領

### はじめに

平成29年3月、幼稚園教育指導要領が改訂・告示された。今回の改訂は、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」に即し、①幼稚園教育において育みたい資質・能力の明確化、②小学校教育との円滑な接続、③現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し、の3つの基本方針に基づき行われた（『幼稚園教育要領解説』2018, p.3）。

「②小学校教育との円滑な接続」に関しては、平成20年3月改訂・告示の幼稚園教育要領から示されてきた部分である。前教育要領においては第3章「指導計画の作成に当たっての留意事項」の中で特に項目分けされずに記されていたものが、今回の改定では、第1章「第3 教育課程の役割と編成等」の中で「小学校教育との接続に当たっての留意事項」という1つの項目としてより明確化された。その内容は以下の通りである。下線部は、前幼稚園教育要領の第3章に述べられていたものと比較し今回新たに示された部分である。

- (1) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基盤を培うようにするものとする。
- (2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

小学校教育との接続のために踏まえるとされている「幼稚園教育において育まれる資質・能力」については、幼稚園教育要領第1章の中で「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3点とされている。また、「幼稚園の終わりまでに育ってほしい姿」については、「健康な心と体」「自立心」「共同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字への関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の10項目が示されている。

一方、平成29年告示の小学校学習指導要領においても幼稚園教育との接続に関する項目が新設され、第1章において「学校段階等間の接続」として以下のように示された。

(1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。(中略)特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

これらより、今回の改訂では幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続が相互に求められていることが分かる。幼稚園の指導者には、幼稚園における教育が小学校以降の学習の基盤となることへの配慮が求められ、小学校の指導者には、児童が幼稚園教育において育んできた資質・能力を各教科の学習へ円滑に接続させる工夫が求められているのである。

では、このように相互の円滑な接続が求められる中で、小学校教育への接続を考慮した幼稚園教育における音楽活動とはどうあるべきであろうか。幼稚園教育における音楽活動は、幼稚園教育要領からどのように読み取れるのか、また、後の小学校「音楽科」の学習においてどのように展開してくのだろうか。それらを把握することは、幼稚園教育における音楽活動と小学校「音楽科」との円滑な接続の一助になり得ると考える。

そこで本稿では、まず小学校学習指導要領「音楽科」の目標や内容を幼稚園教育要領の領域「表現」のねらいや内容と比較する。その上で、小学校「音楽科」への接続を踏まえた幼稚園教育における音楽活動と、幼稚園教育要領の残る4領域である領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」との関係を探り、幼稚園教育における音楽活動のあり方について考察する。

## 第1章 小学校「音楽科」の目標と幼稚園領域「表現」のねらい

幼稚園教育における音楽活動について考察していく上でまず検討すべきと思われる領域が、5領域の1つである領域「表現」である。領域「表現」は、1989年の改訂により領域「音楽リズム」の代わりに、幼稚園教育における音楽活動を包括する領域として設けられた。

領域「音楽リズム」から領域「表現」への移行に関しては、様々な指摘が存在する。永岡(2000)は、移行は「〈表現の仕方の教育〉から〈生きるための基礎的な力としての表現の育成〉への意

識改革であった」(p.205)が、特定の技能を身につけさせる指導を避けるあまり保育現場ではある種の弊害が見え始め、「造形や音楽などのいわゆる芸術系の諸活動が後退する傾向が生じた」(p.205)と述べている。また石川(2013)によると、現場では「〈音楽リズム〉や〈絵画制作〉といった具体的な領域がなくなったことで、そういった活動を保育において行ってよいのか戸惑った状況が見て取れる」(p.106)ようになり、「幼児の表現を『受け入れる』ことが『放置する』ことと同義になっていた可能性もある」(p.106)と指摘している。これらからは、領域「表現」を踏まえた音楽活動の位置づけやあり方が定まらないが故に、幼稚園教育における音楽活動の重要性が曖昧になっていることが窺える。

そこで本章では、まず幼稚園教育における音楽活動を小学校「音楽科」への接続という観点で捉えるために、平成29年告示の小学校学習指導要領における「音楽科」と平成29年告示の幼稚園教育要領における領域「表現」を比較し、幼稚園教育における領域「表現」を踏まえた音楽活動のあり方と重要性について考察する。

### 1-1. 小学校「音楽科」の目標

平成29年告示の小学校学習指導要領は、幼稚園教育要領改訂と同じく中央教育審議会答申を踏まえ、「資質・能力」の3つの柱<sup>1)</sup>に沿うように整理された。

#### 《音楽科の目標》

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次の通り育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

今回の改定で「音楽科」では、「音楽的な見方・考え方」を働かせることで「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成を目指すことが掲げられた。この「音楽的な見方・考え方」とは、小学校学習指導要領解説音楽編(2018)によると「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」(p.10)である。また、「児童が自ら、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、捉えたことと自己のイメージや感情、捉えたことと生活や文化などと関連付けて考えているとき、音楽的な見方・考え方が働いている」(p.11)とも示されている。

この「見方・考え方」に関しては幼稚園教育要領の第1章においても示されており、その具体的な内容については、中央教育審議会答申の中で次のように言及されている。「幼児教育における『見方・考え方』は、幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関わり、

心動かされる体験を重ね、遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関わり方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすることである」(p.74)。また、そのような「見方・考え方」は、「遊びや生活の中で幼児理解に基づいた教員による意図的、計画的な環境の構成の下で、教員や友達と関わり、様々な体験をすることを通して広がったり、深まったりして、豊かで確かなものとなっていくもの」(p.74)と示されている。そしてさらに、「このような『見方・考え方』は、小学校以降において、各教科等の『見方・考え方』の基礎になるものである」(p.74)とも明記されている。すなわち、小学校「音楽科」における「見方・考え方」は幼稚園教育が基礎となるものであり、この「見方・考え方」に幼小接続の手がかりがあると考えられるのである。

また、幼稚園教育における「見方・考え方」の深まりに関して述べられている幼児理解の視点に関連し、幼児期の音楽教育について述べた大畑(1999)の見解が存在する。大畑は、「幼児の音楽活動を援助するためにもっとも大切なことは『いま行われている音・音楽活動』がその子供の生活の中でどのような意味をもっているのか、音楽によって何が育つのかという、幼児理解に基づいた視点をもつこと」(p.12)と述べている。

つまり、これらを幼稚園教育における音楽活動に関して言い換えれば、幼児理解に基づく教員による意図的、計画的な環境構成の下で音楽活動が行われることが、幼児が諸感覚を働かせ思いを巡らせながら身近な音楽環境に主体的に関わることを可能にし、またそれが小学校「音楽科」の学習の基礎にもなり得るということである。

## 1-2. 領域「表現」のねらい

幼稚園教育要領における領域「表現」に関して、そのねらいは次のように示されている。

### 《感性と表現に関する領域「表現」》

感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

#### 1 ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

「感性」という言葉は小学校「音楽科」の目標においても見られたが、領域「表現」のねらいにおける「豊かな感性」については幼稚園教育要領解説(2018)で次のように言及されている。豊かな感性は「幼児期に自然や人々など身近な環境と関わる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられ」(p.223)、「幼稚園においては、日常生活の中で出会う様々な事物や事象、文化から感じ取るものやその時の気持ちを友達や教師と共有し、表現し合うことを通して豊かな感性を養うようにすることが大切である」(p.224)と記されている。これらから、指導者には幼稚園教育の段階から感性を育むための配慮が求められて

いることが読み取れる。また幼稚園教育において育まれる感性は、小学校「音楽科」において「音楽的な見方・考え方」をする際に必要な「音楽に対する感性を働かせる」ための基礎となり得、領域「表現」は小学校「音楽科」の基礎となる領域であることが窺えるのである。

またここで、先に述べた「見方・考え方」が小学校における各教科の基礎となることを踏まえながら小学校「音楽科」の目標と領域「表現」のねらいやその解説を比較すると、「感性」の他にも共通しているキーワードが存在していることが分かる。それらは、「イメージ」「感情」「生活」「文化」である。小学校「音楽科」への接続を踏まえ幼稚園教育における音楽活動のあり方を考慮する際、これらのキーワードが手がかりになると考える。

つまり、小学校「音楽科」の学習において「音楽的な見方・考え方」を働かせるためには、それぞれを関連づける際の要素である「感性」「イメージ」「感情」「生活」「文化」を考慮した音楽活動が幼稚園教育において求められると考えられるのである。

## 第2章 小学校「音楽科」と領域「表現」の内容

前章で述べた通り、領域「表現」においては小学校「音楽科」とキーワード「感性」という点で関連が見られた。また領域「表現」は、幼稚園教育における音楽活動を大きく内包する領域である。そこで本章では、具体的に小学校低学年「音楽科」の内容と領域「表現」の内容を比較し、領域「表現」では音楽に関するどのような基礎を育む可能性を秘めているのかを分析する。なお「音楽科」の内容は先に述べた3つの柱とされている「資質・能力」を踏まえ、「知識」「技能」「思考力、判断力、表現力等」に対応するよう構成されているが、ここでは幼稚園においてその基礎を育むと考えられる「思考力・判断力・表現力等」に当てはまる内容を抜粋し比較する。

### 小学校学習指導要領「音楽科」 《第1学年及び第2学年の内容》

#### 【A表現】

- (1) 歌唱の活動を通して次の事項を身に付けることができるよう指導する。
  - ア 歌唱表現についての知識や技能を得たりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いを持つこと。
- (2) 器楽の活動を通して、次の事項を身につけることができるよう指導する。
  - ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じとって表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いを持つこと。
- (3) 音楽づくりの活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
  - ア 音楽づくりについての知識や技能を得たり生かしたりしながら、次の(ア)及び(イ)をできるようにすること。
    - (ア)音遊びを通して、音楽づくりの発想を得ること。
    - (イ)どのように音を音楽にしていくかについて思いをもつこと。

**【B鑑賞】**

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら、曲の楽しさを見だし、曲全体を味わって聴くこと。

**[共通事項]**

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること。

※『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』(p.162)を参考に作成。

幼稚園教育要領 領域「表現」 《内容》《内容の取扱い》

2 内容

(1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。

(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。

(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。

(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。

(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。

(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。

(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

3 内容の取扱い

(1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。

(2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。

(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、様々な素材や表現の仕方に親しんだり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

小学校「音楽科」においては、「表現」として歌唱、器楽、音楽づくりがまとめられ、「表現」と「鑑賞」の2領域で内容が構成されている。小学校「音楽科」における「表現」は、幼稚園教育における「表現」とは異なる意味で用いられている。

小学校低学年「音楽科」と領域「表現」の内容を比較すると、小学校「音楽科」における「歌唱」「器楽」に関しては、領域「表現」の内容(4)(6)(8)が、「音楽づくり」に関しては、(1)(2)(4)(8)が、そして「鑑賞」に関しては(1)(2)が、主に「音楽科」の基礎を育む可能性を秘めていることが窺える。またそれら領域「表現」の内容には、「楽しむ」「楽しさを味わう」という言葉が見られる。これら「楽しむ」という言葉に関連し、石出(2016)の小学校低学年の音楽学習場面にみられる「遊び」の研究が存在する。小学校低学年の音楽科の教科書においては、「～をして遊ぼう」や「〇〇遊び」という言葉が多く用いられ、それぞれの教科書における題材の半数以上において「遊び」と関わる活動や説明が示されていることが明らかにされている(p.182)。これらから、音楽活動は子どもにとって魅力的な活動である必要が読み取れる。すなわち小学校「音楽科」へ接続する幼稚園教育における領域「表現」を踏まえた音楽活動とは、小学校「音楽科」の表現(唱歌・器楽・音楽づくり)及び鑑賞の基礎となる活動であり、幼児に音や音楽の楽しさを実感させるような活動である必要が窺えるのである。

### 第3章 小学校「音楽科」への接続と幼稚園教育における5領域

ここまで小学校「音楽科」と幼稚園教育における領域「表現」について考察してきた。前章で比較した通りこの両者は、幼稚園教育における音楽活動に密接に関わっていると見え、領域「表現」が「音楽科」の基礎となる領域であることは否定しがたい。

しかし一方、幼稚園教育における5領域に関しては、幼稚園教育要領の中で以下のようにも言及されている。幼稚園教育要領「第2章 ねらい及び内容」には、「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」(p.11)とされているのである。また幼稚園教育要領解説では、「幼稚園教育における領域は、それぞれが独立した授業として展開される小学校の教科とは異なるので、領域別に教育課程を編成したり、特定の活動と結び付けて指導したりするなどの取扱いをしないようにしなければならない」(p.134)とも明記されている。

これらから幼稚園教育における5領域は、小学校における独立した教科学習とは異なり、相互に関連し合いながら各々のねらいが達成されていく必要があると読み取ることができる。つまり、幼稚園教育における音楽活動は、領域「表現」にとどまることではないことが窺えるのである。

そこで本章では、小学校「音楽科」への接続を手がかりに、領域「表現」以外の4領域が幼稚園教育における音楽活動とどのように関連しているのかについて探る。第1章において小学校「音楽科」への接続の手がかりとして示唆されたキーワード「イメージ」「感情」「生活」「文

化」を手がかりに、それぞれの領域を比較分析する。

### 3-1 領域「健康」とキーワード「生活」

領域「健康」では、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う」ことが求められている。ねらいには「健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する」とある。その内容にあるように「幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する」ことは、自分自身の生活を確立しながら周囲の環境や自分自身に対する理解を深めていくことになるだろう。それは、後の小学校「音楽科」の、音や音楽を生活と関連付けるという目標達成に関わる点である。幼児が自身の生活に対する理解を深めることは、生活の中における音や音楽に対する気づきや、生活の中に存在する音楽に親しむ心の育成へとつながっていくと考えられるのである。自ら健康で安全な生活を作り出す力を養うことは、幼児自身が自身の生活というものに関して理解を深めるものであり、それは後に自身の生活を音や音楽と関連付ける際に学習の一助ともなり得ることが窺える。

### 3-2 領域「人間関係」とキーワード「感情」

領域「人間関係」では、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」ことが求められている。その「内容の取扱い」には「幼児が周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること」と明記されている。人との関わりの中で、様々な自身の感情体験をすることは、自分自身の感情理解や他者の感情理解につながるものである。これらは、小学校「音楽科」において音や音楽を自己のイメージや感情と関連づけ「音楽的な見方・考え方」を働かせるという学習の基礎となり得る。幼児期から多様な感情を体験することは、小学校において作曲者の思いや意図を読み取り表現を工夫していくという学習場面等において、自身と音楽を関連づけながら音楽学習をより深いものにし得ることが推察される。

### 3-3 領域「環境」とキーワード「文化」

領域「環境」では、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことが求められている。周囲の環境との関わりについては、「内容の取扱い」において今回の改定で新設された、「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」という項目がある。これらは、小学校「音楽科」においても「我が国や郷土の音楽」に関する学習の充実が求められているように、小学校における音楽学習に継承し得る項目であるだろう。身近な環境に存在するわらべうたや唱歌等

の音楽文化に触れることは、小学校における音楽科の学びにもつながるのである。

### 3-4 領域「言葉」とキーワード「イメージ」

領域「言葉」では「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」ことが求められている。その内容は「いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにすること」とされ、幼稚園教育要領解説には「幼児のイメージの豊かさは、言葉の豊かさにつながっていくことになる」(p.212)とも記されている。言語活動を活発化させることは、幼児の持つイメージを豊かにすることであるということが読み取れる。幼児のもつイメージを豊かにさせることは、小学校における音楽活動において、感じ取った音や音楽の要素と自己のイメージを関連づける際の一助となるものでもある。また、言語活動は小学校学習指導要領においてもその充実が求められている。中央教育審議会答申において言語活動が「表現及び鑑賞を深めていく際に重要な活動である」と定められたことを踏まえ、平成29年告示の小学校学習指導要領においても「A表現」及び「B鑑賞」の指導における配慮事項として、「他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを考えたりしていく学習の充実を図る観点から、『音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置づけられるようにすること』」が示されている(『小学校学習指導要領解説音楽編』2018, p. 8)。領域「言葉」に関し「言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」ことは、小学校「音楽科」にとって重要とされる自己のイメージを豊かにさせるとともに、他者と協働しながら行う音楽活動のための基礎となるのである。

これまで見てきたように、小学校「音楽科」への接続を踏まえ幼稚園教育における音楽活動を俯瞰すれば、幼稚園教育における音楽活動は、幼稚園教育要領に示される5領域全てが関連し合う活動であることが窺える。そして、5領域を相互に関連づけながら行う音楽活動は、幼児の発達をも促進し得る活動であることが推察されるのである。またそれは、幼稚園教育要領において示された「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かう」(p.11) ことも可能にするということである。

小学校「音楽科」への接続という観点から幼稚園教育の音楽活動を捉えることは、第1章で述べた、領域「音楽リズム」から領域「表現」への移行に伴い生じていた課題等に対する打開策の一つとしても有効な手立てになり得ると考えられる。つまり、小学校「音楽科」への接続という観点から幼稚園教育における音楽活動を鑑みれば、幼稚園教育において何を考慮し音楽活動が進められることが望ましいのかが浮き彫りとなり、幼稚園教育における音楽活動が領域「表現」にとどまるのではなく全5領域に及ぶ活動であることが見て取れるのである。

## 第4章 おわりに

本稿では、小学校「音楽科」への接続を手がかりとし、幼稚園教育における音楽活動のあり方について考察してきた。小学校「音楽科」への接続を考慮した際、表現「領域」は小学校「音楽科」の基礎となる領域であることが見て取れた。また、領域「表現」を踏まえた音楽活動とは、小学校「音楽科」の表現（唱歌・器楽・音楽づくり）及び鑑賞の基礎となる活動であり、音や音楽の楽しさを実感させるような活動であることが望ましいとことが推察された。また、幼稚園教育における音楽活動では、幼児理解に基づく教員の意図的で計画的な環境構成の下、遊びや生活の中で音楽活動が行われることが小学校「音楽科」の基礎習得の一助となることが窺え、さらに幼稚園教育における領域「表現」が小学校「音楽科」の基礎を育むことを踏まえれば、「感性」「イメージ」「感情」「生活」「文化」というキーワードがその接続の手がかりとして示唆された。そして、それらキーワードを踏まえ幼稚園教育における5領域を俯瞰すると、幼稚園教育における音楽活動は領域「表現」にとどまる活動ではなく、全領域を相互に関連させながら幼児の発達をも促進し得る活動であるということが浮き彫りとなった。

幼稚園教育の後に行われる小学校「音楽科」の学びの場面において、学習者が音や音楽と自己のイメージや感情、生活や文化と関連づけることができるようにするためには、その前段階として、幼稚園教育の音楽活動において全5領域を関連付けながら幼児の豊かな感性を養うことが求められるのである。そして、小学校「音楽科」の学びを見据え、幼稚園教諭が幼児理解を伴う働きかけの下行う音楽活動は、幼稚園教育要領で示された「幼稚園教育において育みたい『資質・能力』」の育成につながるのである。すなわち、幼稚園教諭がそれらの意図をもって音楽指導を行うことは、幼児が音や音楽に気づき楽しんだり遊んだりしながらそれらに親しみ身に付ける「知識・及び技能の基礎」の習得に繋がり、幼児の音や音楽に親しみ楽しむという「学びに向かう力」を養い、それらを生かし表現しようとする「思考力、判断力、表現力等の基礎」を育むことを可能にするのである。

小学校「音楽科」への接続の観点から幼稚園教育要領全体を俯瞰することは、幼稚園教育における音楽活動のあり方を浮き彫りにするとともに、小学校の音楽指導者が、児童が幼稚園教育において音楽に関しどのような学びをしてきたのかを理解する手がかりともなり得ると考える。小学校「音楽科」への接続を踏まえれば、幼稚園教育における音楽活動は、小学校「音楽科」の基礎を育むとともに、幼稚園教育要領に示された全5領域が相互に関連し合いながら幼児の成長をも後押しし得る、重要な活動であるといえるだろう。

なお本稿では、実際に幼稚園教育においてどのような音楽活動が効果的であるか、またそれらに関する具体的な音楽指導法はどのようなものであるか等については、触れることができなかった。今後は、それらについても検討しながら、幼稚園教育における音楽活動のあり方について更なる考察を深めていきたい。

## 【注】

- 1) 今回の改訂では、中央教育審議会答申を踏まえ、学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力として「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間力等」の3つの柱により全ての教科等の目標及び内容が再整理された。

## 【引用・文献】

- 石川眞佐江（2013）「幼稚園教育要領における音楽活動の位置づけの歴史変遷—領域〈音楽リズム〉から領域〈表現〉への転換を中心に—」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第44号, p.97-110.
- 石出和也（2016）「遊びを導入した音楽学習活動—幼小接続への予備的研究—」『北海道教育大学紀要 教育科学編』66（2）, p.181-190.
- 大畑祥子（1999）「幼児の音楽教育」『音楽教育の研究—理論と実践の統一をめざして—』p.11-16,音楽の友社.
- 永岡都（2000）「保育領域〈表現〉における音楽の意義と課題—公教育における幼児の音楽教育を再考する—」『音楽教育学研究2 音楽教育の実践研究』p.205-217.
- 文部科学省（2017）「小学校学習指導要領（平成29年告示）」.
- 文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編」.
- 文部科学省（2017）「幼稚園教育要領」.
- 文部科学省（2018）「幼稚園教育要領解説」.